

総説

事業構想と存在次元メソドロロジーの相関性考察

—事業構想を前提とした存在次元とそのメソドロロジーの関わり方を考える—

岸波 宗洋

事業構想大学院大学事業構想研究科 教授

要旨

「事業構想研究」の第1号から、事業構想と存在次元の関わりについては、様々に検討、解釈をしてきた。存在次元という思考は、それが事業構想へ向かうところに意味や価値を見出せるよう、自己・他者・世界という構成要素に対する理想、理性（高質性・革新性・責任性）、総じた信念と思想を獲得する端緒として、筆者が所属する事業構想大学院大学の院生諸氏に提示することがその前提である。一方で、存在次元メソドロロジー（存在次元を獲得するに至る方法論的解釈）を理解する上で、事業構想の構造と機能に符合したメソドロロジーを提示しなければ、正しく事業構想に昇華されないことも教育研究の場面で表出された課題である。その点において今回の著書の論点とし、事業構想と存在次元メソドロロジーの相関性を哲学的に論考する。

キーワード：存在次元メソドロロジー、構想の存在次元、社会還元思考、即自存在、対自存在等

事業構想に向かう礎としての存在次元とはなにか？

存在次元は、各人の生の意味であり事業構想における起点であり根幹原理となる私的思想体系であることは、本論文集（事業構想研究第1～3号、岸波、2018～2020）において多様に説明してきた。事業構想という、人・事業・社会へのベクトルを正しく持つためには、まず自己の有り様を過去/現在/未来から見極め、自己の普遍的な思考や価値等を理解しなければ、理想や理性としての源泉を掴むことはできない。他者との同価値性もまた、他者の本質的理性・理想の解釈に基づき導出され得るものであるとする。そして、自己の存在と他者の同価値性の広がりに基づいて純粹秩序としての世界性が生み出されることは、前号「存在次元の形成に関する哲学的試論」（事業構想研究第3号、岸波、2020）において述べている。

他方、本論考において、純粹秩序としての存在次元を事業構想家が獲得するに至ったとして、それが事業構想に正しく昇華されなければ、各人の存在次元はエネルギーを持たない（構想を実現する信念（パッションやオーナーシップ等の原動力や目指す理想・理性の一貫した解釈）を得ら

れない）。近視眼的で不安定な経済合理性や曖昧な理想では、事業構想を精密に描き行動することはできないのではないか。その点において、事業構想と存在次元の相関性をプロセス、ファクトとしてどのように理解することが必要なのだろうか。

■存在次元と事業構想の関係性

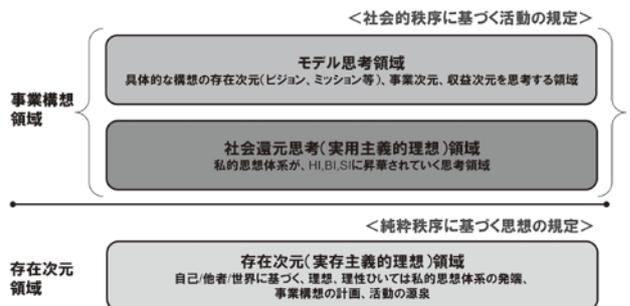


図1 存在次元と事業構想の関係性

上記図1のように、事業構想と存在次元は思考構造の配置上差異があることを仮説として提示しておきたい。

- 存在次元領域
 - ・ 純粋秩序に基づき、大規模な社会性に基づく一般的イデオロギー（資本主義、民主主義、法律主義等）には影響されない。
 - ・ 実存主義に基づき、様々な経験や知識を踏まえ、自己、他者、世界を捉えた私（自己）が望むことが前提。
- 事業構想領域
 - ・ 社会的秩序に基づき、国家社会の一般的イデオロギーを前提に計画や活動を志向する。
 - ・ 実用主義に基づき、多様な社会的持続的効果をもたらす。

一見、相容れない両者に見えるかもしれないが、もちろん、接合点が存在する。以下に、図1を基にした思考プロセスを示す。

①存在次元領域の形成

- ・ 自己/他者/世界の思考理解と理想、理性を獲得する。
- ・ 純粋秩序の思想を獲得する。

②社会還元思考領域の形成（図2:社会還元思考図を参照）

- ・ 特に Social Innovation 段階（SI：理想社会）は、存在次元領域の世界を現代社会に置き換えた理想の表明であり、現実と理想のある程度の折り合いがついたもの。
- ・ SIを前提とした社会還元思考（Social feed back thinking）によって、Human（HI：最初の行動コミットメント）/Business（BI：拡張する行動コミットメント）Innovationの各段階を検討する。
- ・ 図2の社会還元思考に基づき、各段階の行動、活動を獲得する。

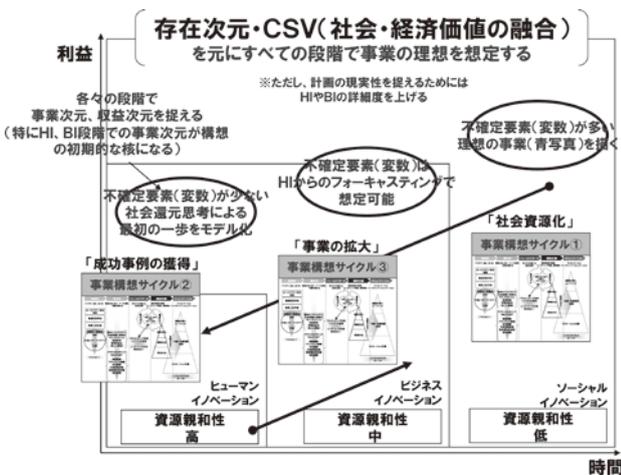


図2 社会還元思考図

③モデル思考領域の形成

- ・ 上述①、②の思考を前提とし、実存的思考から実用的

思想に昇華するためのロジックとして「構想の存在次元」（いわゆる企業のビジョン・ミッション・バリューのように広く社会とのコミットメントを得る考え方）を思考する。存在次元から構想の存在次元に昇華することで、特定少数のコミュニティのみに適用される価値を、社会の不特定多数に昇華する価値へ転換する。ここで、HI/BI/SIの各段階を具体的な行動・活動に昇華するため、モデル化する必要が生じる。ここでいうモデルとは事業次元、収益次元の考え方にに基づき、事業次元においては戦略モデル（いわゆる who/what/how）やオペレーションモデル（資源の獲得とその活動規定）、収益次元においては、精緻なシミュレーションに基づくプロフィット/コストと成長モデル（収益成長を遂げる変数の管理）を検討する必要がある。

上記のように、存在次元と事業構想の差異、およびそれらを一元化するためのプロセスとファクトを理解することで、存在次元という大いなる構想のエンジンを獲得した上で、事業構想を具体的な行動計画へ落とし込むことができるようになると思われる。

では、そもそも、なぜ存在次元と事業構想を融合させる試みが必要になるのだろうか。もちろん、存在次元は各人の生き方、人生の羅針盤となるべきものであり、事業構想というベクトルが存在次元の帰着点なのか？という疑問があるかもしれない。しかし、事業構想を正統に解釈するならば、それは人生の歩みそのものであり、政治家になることも、医者になることも、あるいはアフリカで田畑を耕すことも海洋保護を行うことも企業活動することもすべて事業構想である。さらに付け加えるならば、その価値は、社会/経済/環境すべてにもたらされる価値であるべきで、それが昨今のSDGs経営という言葉に昇華された現代経営の根幹的思想となっていることも理解する必要があるだろう。社会/経済/環境は三位一体を成し、社会価値や環境価値を伴わない事業はESG投資に代表される投資価値を持たない（経済価値を担保できない）という相関性で成立する。つまり、事業構想において確たる思想を持たず、売り手と買い手との経済合理性という関係のみに執着する経済価値モデルでは、既に古き経営と呼ばれる他なく、著者の記した「存在次元から事業次元への事業構想深化」において、新たな経営思考として社会生態モデルやCSVモデル（事業構想研究第2号、岸波、2019）を提示している。そして、言うまでもなく事業構想に社会をよりよく変える思想をもたらすのは、純粋秩序において理想的な世界を描いた事業構想家の存在次元に拠る所ではないだろうか。

ここで、SDGs（Sustainable Development Goals: 2015年国連採択、193カ国がコミットした世界の幸福と持続的成

長のための開発目標)というグローバルコミットメントと事業構想において、純粋秩序と社会的秩序の融合性をどう解釈すべきなのか、ひとつの思考プラクティスとして例示しておきたい。

〔SDGs Practice①〕存在次元領域の形成

前の図1において、存在次元領域を思考する際、自己の発露に基づく存在次元の導出とともに、SDGsの思想的解釈を確立させ、そのSDGs思想を存在次元と融合させる必要が生じる。一方で、SDGsの17の開発目標に基づいて存在次元を思考することは難しい。なぜなら、17の開発目標は、ある実用主義的活動の成果のみを目標/ターゲット/指標として設定しているだけで、その本質的思考や価値に触れたわけではない。例えば、開発目標8番にある「経済成長～」について、具体的なターゲットとしてGDP成長率7%を目標に掲げるが、7%を達成しなければならない価値命題の設定は、構想する側に委ねられている。従って、存在次元領域におけるSDGsとの融合性は、その思想と符合させることにのみ要点を得ることが必要ではないだろうか。SDGsの思想と言えるものは、関係者が多様なコメントや記述によって彩っているが、概ね以下のような言葉で表明されている(国連HPより一部抜粋)。

・「地球惑星の世界観」
Planetary Boundaries

・「社会包容の世界観」
No One Left Behind

・「変容の世界観」
Transformation

各語彙の意味解釈を各人の存在次元において拡大的に解釈し、本質価値の合意に基づき事業構想領域へ接続することが肝要であろう。地球惑星の世界観は、地球・宇宙環境という視座においてサステナビリティを模索しなければならないが、その理由を各人の存在次元においてどのように解釈するかによって、事業構想領域の具体的なサジェスチョンが変化する。例えば、その解釈を子供たちへの環境価値教育のコンセプトとし、持続可能な地球を時代時代につないでいくエシックスに昇華するならば、存在次元における理想の表明は、人類の地球惑星のエシックスの獲得であり、その構想は、カーボンニュートラルのような具体的な活動性や検証性ではなく、思想や教育の創造に主眼がおかれることが考えられる。このように、語彙の解釈を明確化し、その上で自身の存在次元と親和的に思想化することが求められるところである。

〔SDGs Practice②〕社会還元思考領域の形成

Practice①で述べた通り、SDGs思想と各人の存在次元を融合させることで、新たな思想の獲得が成され、それを根拠にして社会還元思考を深めることがこの領域において必要な思考と言える。獲得した思想(あくまでSDGsとコミットし得る私的思想体系)に基づき、前述のHI, BI, SIを検討していくことになる。無論、前述の通り、ここでも思考起点としてSI段階からイメージを深化させなければならぬだろう。その際、SI段階では、17の開発目標にリーチする必要はなく、あくまで、各人の存在次元とSDGs思想との融和に基づく具体的な社会変容イメージが、事業構想への接合点になる。前述の一般化した「社会還元思考領域の形成」における考え方に基づく。

ただし、社会還元思考を行うにあたり、17の開発目標に基づいたモデル思考につながる解釈が必要になることも想定しておくべきで、HI段階の思考は極力モデル思考に近い考え方になるため(スタートアップ段階の戦略モデル等を志向する、という意味で)、17の開発目標の意図を汲み取っておくことを勧めたい。それは、17の開発目標の一つにコミットすることでは必ずしもない。例えば、開発目標の1番にある「貧困をなくそう」というスローガンのみで、誰一人取りこぼさない社会をつくることができないことは自明で、様々に関連付けられた社会/経済/環境要因を踏まえなければSI段階の理想社会の有り様にコミットすることはできず、その意味で有機的に関連付けられた複数(あるいはすべて)の開発目標を一つの目的として認識すべきではないだろうか。

〔SDGs Practice③〕モデル思考領域の形成

Practice②で述べた通り、モデル思考領域において、HI段階のスタートアップをモデル化するにあたり、その具体性の獲得は、思想を元に導出されたSI段階のモデルから社会還元思考によって有機的に結合された複数の開発目標を達成するためのモデル思考でなければならないだろう。それは、複数の開発目標を達成するための構想の存在次元(ビジョン/ミッション等)であり、戦略モデル(who, what, how)であり、オペレーションモデル(資源性とその活動の規定)であり、キャッシュフローモデル等である。

ここまでの検討においてなお、存在次元や思想を元にした一連のプロセス思考が果たして必要であるのか、疑問に思うかもしれない。この点において、前に述べた事業構想のエンジンは構想者自身が持ち得るもので、その根底にある存在次元と派生的思想の具現化において初めて事業構想家たる理想や理性、それらを総じた信念を獲得するにいたるのではないだろうか。また、SDGsの簡略的枠組みである17の開発目標を有機的に思想として解釈する意図が必要なのか。ひとつは、SDGsは国連が採択した過去最大規

模のコミットメントではあるが、矛盾を孕んでいることもまた確かなことで、例えば、開発目標14番の「海の豊かさを守ろう」を優先的に実施した場合、漁師を生業とする人々の職を脅かす結果となり、ひいては開発目標1番の「貧困～」を反故する結果になりかねない。このような関連付けられる事象性を網羅し本質的な解決方策を模索することが必須で、その矛盾との戦いを続けなければSDGs思想にコミットしたことにはならないのだろう。

経済合理性に依拠する現代社会の解釈

すでに経済合理性に関する解釈については、前号にてマルクス (Karl Marx) の『資本論』(Das Kapital) 等の言説を元に様々な解釈を論じた (事業構想研究第3号, 岸波, 2020)。本著にて事業構想と存在次元メソドロジーの新たな解釈を構成するにあたり、再度経済合理性に対する事業構想家の捉え方を総括しておく。

①経済価値を合目的化するとフェティシズムに陥る

前号で示した通り、経済価値を希求することは、事業構想の大事な価値のひとつであり、否定すべき事由は見当たらない。現代社会においては、経済価値によって持続的成長を担保し、活動がより大きく精錬していく様を多々目にしている。一方、マルクスの言説によれば、お金を目的化することでフェティシズム (人の物象、貨幣の万能化) を促す側面があることを危惧している。我々も日常的に、自身の社会人としての価値が経済価値化していることを実感しているのではないだろうか。この、一見コンフリクト (社会矛盾) と考えられる事象性を解釈しなければ、事業構想の本質にたどり着くことはできないと考える。

例えば、「営業職にあるAさんは、年間10億売り上げる。会社では誉めそやされ、「10億の男」等と呼ばれている。しかし、昨今の景況下、努力むなしく彼の売り上げは半分以下に落ち込んでしまう。すると、今度は「元10億の男」と呼ばれる。周囲は、彼の努力や人格を理解しているのに、彼の稼いだ売り上げでしか彼を認識しなくなっていく…。」こんな話は枚挙に暇がない。

ひとつ総じて言えることとして、この場合、Aさんも周囲の同僚や上司部下も、会社との迎合性においてのみ、自己の目的や活動を規定している可能性がある、という解釈である。会社とは小さなコミュニティであるものの、社会人にとって、人生の半分近い時間を費やすアイデンティティともいえる集団である。また会社は、資本家を頂点とする資本主義社会において、富を分配する装置である。つまり、会社の目的は否応なく利潤追求であり、それができなければ会社の社会的な存在意義は損なわれる。だから、会社に従属する構成者 (社員) は同じように経済合理性に邁進するのは当然の成り行きであろう。ただし、それは会

社の目的を了承したに過ぎず、利潤追求のためにはドラッカーの言うとおりの「顧客創造」を第一に志向しなければならない (事業構想研究3号, 岸波, 2020)。つまり、事業や製品サービスによって他者を掬い取るその態様をもって、利益貢献の端緒と成すのである。だからこそ、会社の合理的目的を了承したのみでは、利潤は生まれない。社員は、顧客を見る理由を知らなければならない。

一見、当たり前のことなのだが、この解釈を誤る出来事が前の例示だ。売り上げに執着するためには、何より顧客と向き合わなければならない。にも関わらず、自身の成果に慢心し、結果周囲からはAさん=10億等と経済価値のみのレッテルを貼られ、これが災いし、Aさん自身フェティシズムを体現する (顧客=金づる (人ではなく金) と見てしまう) ことになるだろう。つまり、事業構想家の事業構想の目的は、「他者を助けること」にあり、彼が「経営者としての側面で富を分配するために利潤追求を手段として志向する」、という言い方が適切ではないか。この繊細な目的論的解釈を理解しなければ、稼ぐことも助けることもままならないと思える。

もう一点、事業構想家が経営者としての役割や機能を重視し、利潤追求を目的化することは正当性を持たないのか? という疑問である。同じく目的論的解釈として、恐らく利潤追求が目的になる意味を、経営者自身が正しく理解する必要があるのではないだろうか。前述のように、会社の目的が利潤追求であることを否定する向きはないだろう。一方で個である経営者がそこに目的を見出すためには、その経済価値によって何を成し得るのかを解釈する必要があると考えられる。その最たるコミットメントは従業員への富の分配に基づく幸福価値の創出、ひいては資本主義社会の維持、という社会的秩序への貢献である。その目的論において、経済合理性は尊い活動となる。しかしながら、それが個人の私利私欲に基づく目的となるならば、ルソー (Jean-Jacques Rousseau) 「不平等起源論」(Discours sur l'origine et les fondements de l'inégalité parmi les hommes) の言説通り、「人間の善は、不平等を強いる社会によって腐敗した…。」言い換えれば、「私有」によって根源的不平等 (奴隷や貧困、悪徳等) が生じた、とする考え方に納得せざるを得ない。つまり、資本主義構造とは本来、不平等の端緒を既に有しており、目的論的解釈に基づき、経営者に高度な倫理観を求める構造になってしまっていることも理解しておきたい。

ちなみに、社会的秩序を目的とした活動性は社会システム上数多存在する。国や世界の秩序を守るための軍備と統制 (世界がひとつではない以上必要な秩序維持システムという意味で)、警察による犯罪という無秩序の排除、消防や救急という人や財産を守るための活動など、である。これらは、すべて我々の幸福価値に資するものである。企業

経営者も同様に自己/他者/世界を見据え、その集大成としての理想と理性を元にした存在次元を保持し、不平等への挑戦、幸福価値の最大限の希求が社会要請となっている。それが、前のSDGs経営に代表される新たな経営のパラダイムなのだろう。

純粹秩序としての存在次元解釈

～自己、他者、世界を知る理由

前述の通り、事業構想と存在次元の差異、その融合点において一定の理解が得られたとし、存在次元の解釈について論を進める。

前号から存在次元の中核的なメソドロロジー解釈に用いている自己、他者、世界の必然性について、哲学的解釈を振り返ってみたい。

まず、前号（事業構想研究第3号、岸波、2019）において論述したサルトル（Jean-Paul Sartre）の「存在と無」では、「実存は本質に先立つ」（l'existence précède l'essence）という著名な言葉を残しており、言い換えれば「あなたの実存は、人類の本質に先立つ」である。これは、自己の存在において、実存（自己が認識し得る存在）が本質を凌駕する、とする考え方である。事業構想に昇華するための存在次元の端緒は、まずは自己であり、様々な事業構想家は、本質に先立って実存を求め考え行動しており、その実存は、多様な構想を育むインキュベーターとも言えるだろう。その点において、自己の存在の認識を明確にしなければ、自己の普遍的価値や思考を炙り出すことはできず、自己の普遍性を得なければ時代の変遷も捉えない一過性のビジネスモデル（近視眼のビジネスアイデアのみ）に終始する。実存は、人の数だけ存在する。だからこそ、自己の大切な何かに気づき、それが事業構想という活動に昇華された時、ゆるぎないオーナーシップとパッション、活動の質と量に昇華されることを理解しておきたい。

では、他者という捉え方はどうか。

同じくサルトルの「存在と無」、また彼の演説の際の言説である「アンガージュマン」（Engagement）は、他者への働きかけによって自己実現を捉えていく、という現実的な作法として他者の存在との関わりを指し示すものである。つまり、他者がいるからこそ、自己を実存に（自由に）変えていくことができる、という示唆であり、実際にサルトル自身が社会活動の啓蒙においてこの言葉を多用していたことから、前号（事業構想研究第3号、岸波、2019）に著者が示した「他者との同価値性」が、自己の生きる意味において重要なエレメントとなることを推察することができる。また、前述のルソーは、同じく「人間不平等起源論」において、「個人の自由意思の集合体が世界になる～」としており、自己と他者によってルソーの言う「一般意思」

（Volonté générale）を表出させることができる、としている。その例示として、ルソーは「社会契約論」（Du Contrat Social ou Principes du droit politique）において、政治における代議制ではなく、直接民主制を唱えている。これは、現実的に大変困難を要する考え方ではあるが、すべての人間が賛同する同価値性（一般意思）を尊重し、一方で自己の自由に基づく社会契約によって、人が個を尊重しゆるやかな絆を得ることができる社会になるとしている。

恐らく、多くの人々はこの考え方に現実性を見出せないかもしれない。現代社会において、これが明確に体现できている国家も存在しない。しかしながら、恐らく我々が見ているものは純粹秩序ではなく、社会的秩序であり、それは多少の犠牲において成立する社会をさすものである。国家、社会に縛られず、自由に人との結びつきを志向することができる純粹秩序においては、ごく当然の思想とも解釈できるのである。

もう一点、世界という解釈を論じておきたい。

前号（事業構想研究第3号、岸波、2019）に著者が示した「自己の存在と他者との同価値性の広がりに基づく世界性～」について前述のルソーの描く世界性との符合点はなにか。解釈すれば、自己の存在の認識に基づいて人生や幸福を希求する点においてルソーもサルトルも言説は一致していると思われ、また他者の存在が実存足らしめる（ルソーの場合、自己を主体としつつも一般意思がなければ個の自由を保障する社会が成立しない、と明示している点で）世界性を求めている、と解釈できるのではないだろうか。また、直接民主制を例示している点を現代のネット社会になぞらえた場合、ネット社会自体が、個の自由と緩やかな絆によって保たれている側面があり（一部のSNS等）、純粹秩序が社会の合理性と符合する側面がある、つまり、事業構想と存在次元の融合性と同じく、純粹秩序と社会的秩序が必ずしも分離されるものではない、という認識も生まれる可能性がある。

我々は、家族という社会の最小単位となるコミュニティ（孤児であっても養護施設や里親等の家族を構成し得るという意味で）を有しており、その家族は、個の尊重が本来明確な集団であるべきで（親は子への無償の愛によって子を自由にし、親は自己の存在を認識するために親であり続けるという意味で）、それを体现している家族も少なからず存在していることを考えれば、純粹秩序に基づく世界性を捉えることが、事業構想において理想社会を描くことのひとつの要点を得ることになるのではないかと考える。

存在次元を獲得するメソドロロジー

存在次元を考える上で、何かしらの方法論に基づき理解を深めることは重要である。ただ、存在次元というものが、

あくまで実存主義に基づく考え方であるならば、その方法論も人の数だけ存在してかまわない。人の生き立ちや感性、環境は日本人のような単一民族と言えども千差万別で、その紐解きは各人の琴線を理解する各人の考えたアプローチに基づくことが重要ではないか。著者が所属する事業構想大学院大学での存在次元に関する院生との関わりにおいて、やはり自己の紐解きにおいて自己がその方法論にリーチすることと比例して、存在次元への核心に近づいていく自負を持つことは、経験上理解している。つまり、方法論自体を存在次元の主体者に考えさせることが、存在次元の獲得においてまた重要であることも附言しておく必要があるだろう。

一方で、存在次元の関わりにおいて、ある種の類型的解釈が可能な側面がある。その点において整理していく。まずは、存在次元を思考するプロセスについて、経験価値的な考え方を以下に述べる。

〈存在次元の獲得プロセス（時系列的思考過程）〉

①自己の生き立ちのたな卸し

自己の普遍的な思考や価値等にリーチするためには、自己の知識や経験等をたな卸しする必要がある。原則的に人は忘却の生物であり、自己の本質を形成するエレメント（親の言動や自己の経験等）を多くが忘れていく。そのことで問答法（ソクラテスのいう本質探求のメソッド）の限界が生じてしまうことがあり、その点で、記憶の準備をするために以下のような生き立ちの整理を推奨している（事業構想研究第3号、岸波、2020）。

「構想者が自己の存在をどう認識するのか？（その思考、価値等の本質的理解）

構想を考える起点において自己の過去～現在までを、叙事的、叙景的、叙情的に考察、洞察、内省を行い、自己の存在とは何であるのか？の問いに本質的認識を見出す（図3）。」

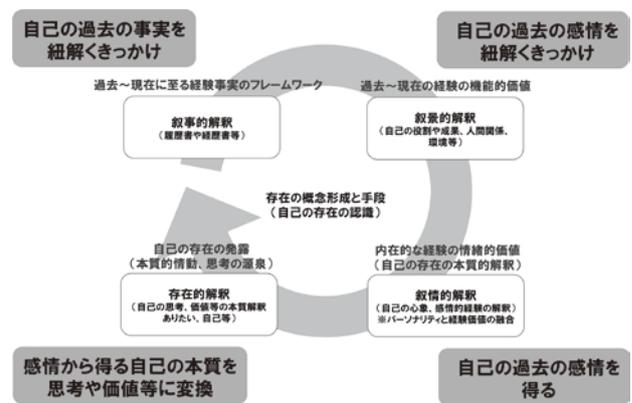


図3 自己の存在の認識アプローチの構造理解

上記は自己の存在の認識における思考プロセスである。叙事的解釈は、自己の形骸的略歴の表出であり、いわゆる忘却の彼方から自己の重要なエレメントをすべて引っ張り出すために、そのきっかけとなる事象を思い出すための最初の作業になる。履歴・経歴と言われる表面的な自己の転換点（大学→就職など、いわゆる人生の岐路や自己の重要な表層的決定等）を表出することが望ましい。

そして、叙事的解釈に基づき、叙景的解釈（叙事的な事象に関連した環境や人間関係、自己の果たした役割、成果等）に移行し、記憶を深めていく。例えば、自身が大学生から社会人になるにあたりどのような環境・人間関係変化（一人暮らしを始める、恋人と別れる等）、自身の組織における役割や責任の変化（サークルの部長としてコミュニティをまとめる責任から社員として研究開発部に配属され開発成果を製品に昇華する責任へ、等）を丁寧に記憶の絡まりから解き出していく。この叙景的解釈が一定の具体性を持った時に、その叙景事象の様々な自己の感情にリーチすることができるようになる。いわゆる「感情を思い出す」（叙情的解釈へ移行する）のだ。

実は、存在次元プラクティスにおいて、この感情との向き合いが自己の本質を理解する多くのきっかけを有している、と著者は仮説的に考えている。これは、感情が非常にシンプルな自己の価値や思考を端緒にすることが圧倒的に多く、本学院生と対話するにあたり、感情への寄り添いが院生各人の真意に近づくことを経験している。人の感情は先天性・後天性の二元的獲得を成すもので、例えば人の生存本能を脅かすことによる怒りは先天的に備わった感情と言え、一方で高次コミュニケーションとしての齟齬（考え方の違い等）は多くが後天的（親や友人、先生、憧れの人等との関わり等）にもたらされる感情であることが多いのではないだろうか。

特に、自己の思考や価値の本質を理解するためには、後天性の感情に気づき、その端緒にさかのぼる必要があると考える。

②自己の存在的解釈

前述①のように、叙事・叙景・叙情を経る意味解釈を捉えたところで、自己の存在的解釈に移行する。前の通り、後天性の感情を元に普遍的な思考や価値等を捉える。例えば、Bさんの中学年齢期の親との会話を以下に列挙する。

親「第一希望の高校はどこなの？」

Bさん「高校にいかなくてもいいかな…」

親「駄目。そんな選択肢はないよ。中卒でどうやってお給料をもらうの？」

Bさん「給料は生きていけるくらいでいいじゃん。早く自立して人を助けたいんだよ。」

親「まともに仕事なんてないよ？お金がなきゃなにもできない。」

Bさん「お金、お金って、そんなにお金が大事なの？」

親「一番大事だよ！」

さほど裕福ではない家庭に育ったBさんは、中学の卒業文集で将来成りたい職業欄に「お金持ち」と書いたそう。その後社会人になり早くに独立し、一心不乱に利益を追求するようになる。しかし、上記会話でのBさんの本心は、とても空しく辛い思い出であったと言う。だからこそ、叙事、叙景、叙情のプロセスがなければ思い出すことがなかったと回顧する。自身の親のイメージは、愛情深く朗らかで聡明、社会を支える立派な仕事をしなさい、と常日頃から言われてきた。それだけに、この発言に疑問を抱きながらも、一方で親の期待に応えようと利潤追求を旨としてきたそう。

では、Bさんの本質はなにか？恐らくは、幼少期に捉えた親の聡明さに、また親との会話で感じた空しさに、その本質の端緒があるのだ、とBさん自身結論付けた。自身の利潤追求ありきの生きかたは、一時の親の感情との関係性において成立していただけで、親が他界した際、ある種の価値の束縛が自分の本来望むものではなかったとしている。そしてその後、Bさんは求める聡明さに基づいて、存在的解釈（自己の普遍的な思考、価値等）を深め、職業や所属、生き方を大きく変えることになる。

恐らく、このような埋没したクリティカルな記憶は誰にでも存在するのではないか。それらひとつひとつが後天的に人を形成し、その後の人生を大きく左右していくことになるのだろう。そして、それらは必ずしも絶対的実存的な自己の存在の認識に寄与しているわけではない。相対的実用的解釈によって、この国家、社会での生き易さと同調していくのが常であるように思う。

事業構想大学院大学での教育コンピテンシーである事業構想家の有り様とは、相対的実用的解釈によってもたらされる側面も当然ある。言い換えれば、正しく経済合理性を

獲得できるという点である。しかしながら、前述のように、経済合理性の追求だけでは、現代の経営において差別や不利益になることを理解しなければならない。SDGs経営のように、社会/経済/環境の各側面においてポテンシャルを持ち、総合的融和的に価値を創出し得る企業や経営者、事業構想家が最終的にバランスされたあらゆる価値を獲得できるという意味で、上述例示をひとつの問題提起としておきたい。

また、もう1点、自己の存在の認識段階で、存在次元メソッドとして仮説的に著者が取り組んでいる「自己客観化」について以下に概説する。

・「自己客観化」とは…

自己の表出された感情（特に曖昧ではっきりしない感性に近い感情）を理解するために、自己の先入観やバイアスの伴った感性を排除し、純粋な受容を促すための方法。西田幾多郎の「善の研究」にある「純粋経験」に基づく著者の考え方。ものを純粋に受容することで、自己の純粋性を発見する。それは、本来、主観と客観に区別されない中庸の瞬間をさす言葉であり、なにかが分からない写真や絵を見たときに、何かが分かる直前に得る感性をさした状態。著者は、あえて自己客観化と言っているが、自己という主観と客観化された結果との間にあるもの、という意味で捉える。

これは、ひとつのプラクティスとして「写真を撮る」という行為と、その写真を見て「自己客観化する」という思考に著者が方法を得ているものである。前述のように、直接的で強い感情は、記憶の糸を手繰るにつれ鮮明に復元することができるが、いわゆる親子げんかの端緒のように、親が子との共感性（自身がかつて子であったことの曖昧な記憶や感性を忘却し、厳然と積み上げた親としての価値、思考を元に言動することでコンフリクトを起こす）を失うような場面では、大きな感情の記憶ではなく、子供の頃の曖昧な記憶や感性を喪失していることが原因であると考え、それを再び獲得するための仮説的メソッドとして取り組んでいる。具体的な作法として、以下のようなプロセスを要する。

・写真を撮る

留意すべきは、この時に思念は持たず、直感的に撮影に徹する必要がある。つまり、純粋経験の元となるものに意味付けしてしまうと、その解釈が画一的恣意的になり、純粋経験が阻害される。また、極力直感的でありながらも自己の表出を促すためには、ファインダーをのぞき、画角（撮影される範囲）に集中する必要があるだろう。あくまで直

感性を表出させる手段としての捉え方である。

・写真を現像する

デジタル、フィルムの別なく、現像（イメージ化）が必要である。特に、ある一定の大きさで閲覧することで、自己の意図しない対象物の解釈が生まれることもある。この際に、自己客観化を促すために、ある種の客観性に寄せたイメージの再現（額装する、フレームを残す、印画紙に整然とプリントするのではなく無造作に配置する（角度を変える等）、色彩を排除/強調する等）

・写真を閲覧する

自己客観性を促すためには、撮影したロケーションや時間、状況等をつぶさに記憶している段階では、まだ尚早であり、ある程度記憶の詳細度が下がった段階で閲覧することで撮影したものの純粋な受容を促すことができるのではないかと考える。自分が撮影した写真、という観念を排除したところで、自己客観性が生まれる（直感性に気づく）。

上記はプラクティスの1例にすぎないが、純粋経験を同様の手法（他人の作り出した音楽や絵画、写真等）で獲得することも恐らくは可能であろう。ただし、自身の写真は、瞬間的直感的な切り出しが可能で、その点において、潜在意識の投影に向けたメディアとも言える。その潜在意識の受容が、自己客観化であり、顕在化された意識より本質的な何かであることが想定できるのではないだろうか。これは、多くのプロ写真家が自己内省をテーマにして写真撮影に勤しんでいることから推察されるところである。

③他者の生い立ちの棚おろし

冒頭記述において、自己/他者/世界という存在次元の重要なエレメントについて触れている。その他者について検討を進めるにあたって、基本となる考え方がある。まず、他者とはなにか？それは、自己以外のものを総称すると捉える。自己以外のものの捉え方として、サルトルは前出「存在と無」において即時存在と対自存在に分類している。即時存在は自己認識がなく、本質（飲み物を入れる、といった機能価値）に先立って作られるもの（コップ等）をさすとする。対自存在は、自己の認識を持つが、本質が先立たない（生まれ出ずる意味は自己が生み出された後に自己が見出す）言い換えれば自分以外の人のことである。一方で、他者の捉え方は多様化している。SDGsのように、現代社会において、クリティカルな課題は即自存在に大きく向けられ、地球環境や動植物の保護等、過去に尊ばれなかった事象や物事に自身の幸福を符合させる人が多くなってきた。だからこそ、この現代社会において、他者を即自存在あるいは対自存在と捉える事は既に重要ではなく、何を他者と捉え、その同価値性をどう見出すのか、に焦点を合わせる必要がある。SDGsにおいて、常に世界中の話題にな

る少女グレタ（Greta Ernman Thunberg）は、地球が穢れていく（温暖化や生態系の破壊、多くは人の所業に基づく即自的結果）ことに本気で戸惑い、悲しみ哀れんで我々に訴えかける。かつては、動物さえも物として扱ひ（日本の動物保護法の制定前は、器物損壊罪が適用されていた等）著しく地球環境を破壊し（特に産業革命以降の公害等）それでもなお、経済合理性に邁進してきた過去が嘘であるかのように、である。つまり、我々の倫理観や価値観、そして共感性の広がりには進化している。これは、同価値性の思考において、例えば地球環境を破壊することで人が地球に居住できなくなる、という危惧が同価値性の端緒となっていることで、地球を他者と捉え、地球のために人とという生物種が犠牲になる場面さえ許容する、という考え方を獲得したためではないだろうか。その点においても、他者の多様な解釈を否定することはできない。では、その他者をどのように解釈していくべきか。基本となるメソッドは、自己の存在の認識における生い立ちのたな卸しと同様である。叙事、叙景、叙情そして他者の存在的解釈である。もちろん、これらは対自存在において明確化できるエレメントではあるが、即自存在においても同様に解釈を変異させることで受容可能である。例えば、他者を前出の地球とした時に、その叙事・叙景はまさに地球の歴史を紐解くことに他ならない。一方で、地球の叙情とは、恐らく地球自体の情緒に目を向ける人（恐らく存在次元における自己）の慮りに基づく表明であることが想像できる。元々、存在次元における純粹秩序は、実存主義に基づく主観的思想（私的思想）が前提であり、その意味で、他者への共感が得られ同価値性を獲得した自己の解釈に基づく他者の叙情的解釈は人・物問わず有効ではないだろうか。

④他者の存在的解釈

他者の思考や価値を理解することで、普遍的な同価値性を獲得することができるという前提において、他者の存在的解釈を、自己の存在的解釈同様考えることになる。その場合、前項のように、対自存在については、他者（人）の叙事、叙景、叙情的解釈に基づき、その価値や思考、ひいては同価値性を自己の主観において獲得する（図4）。

では、即自存在としての他者の存在的解釈はどうか。前項における地球という他者の叙情的解釈と同様、地球との同価値性を受容し得る自己が類推的に解釈し、その思考や価値（地球というものの即自の本質）を認めるプロセス、ファクトが必要であろう。前述のように、元来の存在次元とは自己にひもづく多様な思想を認める（自分の生きかたを自分で決める）実存主義的思想であるため、存在次元を獲得する際に、そのエレメントがすべて相対化されている必要はなく、むしろ絶対化されていることに存在次元としての意義が認められるからである。

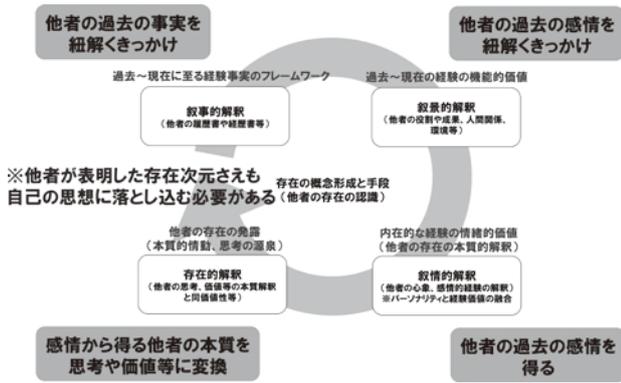


図4 他者の存在の認識アプローチの構造理解

⑤世界性の検討

前号において、世界というものの捉え方について、以下のように説明した(事業構想研究第3号, 岸波, 2020)。「自己の存在と他者との同価値性の広がりに基づく世界性をどう認識するのか?(世界の主観的本質的な理解とそのあり方)・同価値性から派生する世界の構成要素の端緒の発見(世界がどのような幸福で満たされるのか?)・世界性の概念定義」

また前号にて、世界性という言葉の端緒について、著者は以下のように説明している。「世界性という捉え方は、社会や国家、あるいは企業や共同体というものが自然の結果に基づくものではなく(同じ国家人民でありながら宗教や価値観が違い争いを続けているのが現状であるという認識を前提に)、強制的非合理的なある結論であると考えた場合、事業構想の捉えるべきものは「社会」ではなく、「世界(その抽象的概念としての世界性)」と読み替えることができる」。これらに照らして、世界の構成を以下の図5においてまとめている。

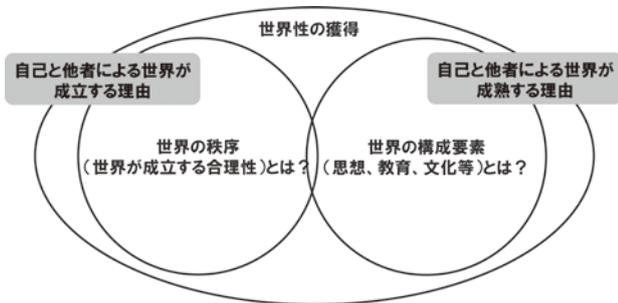


図5 自己の存在と他者との同価値性の広がりに基づく世界性

・世界の純粹秩序(概念定義)とはなにか?

世界が、自己の存在と他者との同価値性の広がりに基づくもの、であることは前述した通りであるが、その同価値性によってどのような純粹秩序を獲得することができるの

か。ちなみに、純粹秩序の解釈として、法律や資本や民主制等の社会性を持たない思想自体が秩序(世界の安寧たるメカニズム)を得ている状態をさすものとする。この場合、自己と他者の広がりに基づいて、ルソーのいう「一般意思」、サルトルのいう「アンガージュマン」のメカニズムを獲得する必要が生じるだろう。これは前述のように、大変難しい高度な理性を互いに要求するものとも言えるが、純粹秩序のメカニズムは、社会システムとは一線を画すものであり、あくまで同価値性に基づくものであることを理解すべきだろう。例えば、親が自己、子が他者である場合、その構成は、社会の最小単位となる家族であり、これが世界とも解釈できる。家族というものが継続して存在する理由はなにか?恐らくは、「愛」であり、確かな「共感」や「慈しみ」等の情緒であることは伺い知ることができる。つまり、そのような絆(心のつながり)というものが、純粹秩序のメカニズム、ということである。家族という世界は、その多くが法律や資本を介在させずとも自浄的に成り立っている(秩序足り得ている)。一方で、無論すべてが秩序を持っていない(貧困や子の物化によって、親が子を虐げているような状況が散見されるという意味で)。存在次元は、冒頭章に記述した通り、それが即ち事業構想になるわけでも、社会的秩序になるわけでもない。しかしながら、その純粹秩序(売り手と買い手、提供者と需要者、社会と構成者、資本家と従業員等多様な関係性を維持する安寧の源泉)が文字通り純粹で聡明な絆によって結ばれ、理性的解釈の中で互いの幸福のために寄与する状態は、「理想」としての端緒となり得る。また、同様に、そのような絆を維持、成長させるため、人だけが持ち得る「理性」の有り様を考えることが、まさに存在次元の中核を成すエレメントなのだと考える。

・世界の構成要素

前段に述べた存在次元の核となる秩序と、その主たる表出としての理想、理性までを大方理解できたならば、いよいよ事業構想領域への布石(社会還元思考の礎)となるべき、世界の構成要素を検討する必要があるだろう。これも前段述べた、「純粹秩序の解釈として、法律や資本や民主制等の社会性を持たない思想自体が秩序(世界の安寧たるメカニズム)を得ている状態」から、社会性の前提要件となり得るその世界の思想や教育、文化等の端緒を理解しなければ、それが事業構想になることも、社会システムになることもない。言い換えれば、未来永劫狭く小さなコミュニティのままである、ということだ。もちろん、狭く小さなコミュニティを否定するものではないが、事業構想大学院の院生は、この国家、社会のシステム(前述の法律や資本、民主等といったイデオロギー群)と融合して社会/経済/環境価値を構造化した事業構想に邁進していくことが

大方の前提であり、そこに寄り添わなければならない。では、世界の構成要素とはなにか。それは秩序に裏付けられた世界の中核的な価値や思考を表出したものである。それらが、一般的に解釈・浸透することを条件とするならば、思想や教育、文化等のあり方となる。例えば、日本国憲法は、自由と平等、戦争放棄等の国家思想を前提に条文化されたものであり、日本のような硬性憲法下では、この思想の普遍性によって日本国の安寧が担保される側面がある。つまり、思想は、法や教育、文化、ひいては社会システムに至るまでを統制する考え方であり、世界の中核を成すものであることを理解するべきであろう。前号にも掲げている本来的な事業構想家の理性（高質性、革新性、責任性）は、この思想に基づいて構成・獲得されるべきもので、その意味でも事業構想の大事なエレメントとなるだろう。

まとめ

本論では、事業構想との相関性によって価値を得られる存在次元とそのメソドロジーのあり方について説明するとともに、純粹秩序としての存在次元、社会的秩序としての事業構想の接合と思考プロセス・ファクトにおいて、著者の所属する事業構想大学院大学での教育研究を実証環境として論考した。また、存在次元という実存主義に基づいた思想の獲得に向けたメソドロジーについて掘り下げ、メソッドとともに事業構想家の存在次元獲得に寄与すべく検討を行った。これらはすべて、事業構想家のコンピテンシーにコミットするための考え方であり、引き続き本学を実証の場と捉えて、研鑽していく所存である。

謝辞

これまでの事業構想研究での論旨の発表にあたり、存在次元の思考を得るに至った起点を与えて頂いた事業構想大学院大学東英弥教授、存在次元という言葉の端緒を与えて頂いた一ツ橋大学野中郁次郎名誉教授、および論文集のレフェリング、編纂、指導等に常日頃よりご尽力頂いている先生方、また様々な存在次元に関する気づきを与えて頂いた先生方、本学院生諸氏に心より厚く御礼申し上げる次第である。

参考文献

- 東英弥 2018a. 「なぜ今、事業構想が必要なのか—自ら事業を構想し、始める精神」『事業構想研究』1: 29-30。
 東英弥 2018b. 「なぜ今、事業構想なのか?—第2回—」『事業構想研究』1: 35-38。
 Dewey John, 清水幾多郎(訳), 清水礼子(訳), 1968 『哲学の改造』岩波文庫。
 Drucker.P.F. Library Journal 2006 『Innovation and Entrepreneurship』
 岸波宗洋, 事業構想大学院大学出版部, 2018『事業構想研究第1号』
 岸波宗洋, 事業構想大学院大学出版部, 2019『事業構想研究第2号』
 岸波宗洋, 事業構想大学院大学出版部, 2020『事業構想研究第3号』
 Marx Karl, 向坂逸郎(訳), 1995 『マルクス資本論(全9冊)』岩波文庫。
 野中郁次郎, 徳岡晃一郎 2012『ビジネスモデルイノベーション』東洋経済新報社。
 Sartre Jean-Paul, 松浪信三郎(訳), 1999 『存在と無(上巻)』人文書院。
 Sartre Jean-Paul, 松浪信三郎(訳), 2005 『存在と無(下巻)』人文書院。
 Rousseau Jean-Jacques, 桑原武夫(訳), 前川貞次郎(訳) 1954 『社会契約論』岩波文庫。
 Rousseau Jean-Jacques, 本田喜代治(訳), 平岡昇(訳), 1972 『人間不平等起源論』岩波文庫。

**A consideration on the Relationship
between Project Design and Existence Dimension Methodology:
Thinking about the Relationship between Existence Dimension Premised on Project
Design and its Methodology**

Munehiro Kishinami

Abstract

Ever since the first issue of “Project Design Studies” we have examined and interpreted the relationship between project design and existence dimension in various ways. The thought of existence dimension is based on the assumption that it is to be presented to the graduate students of the Graduate School of Project Design, to which this author belongs, as the initial step toward acquiring ideal and rational mind (high quality, innovation and responsibility) vis-à-vis the component elements of self, others and the world as well as aggregate beliefs and ideas, so that it may find its meaning and value in its way to project design. At the same time, it is a task that has surfaced in the educational study scenes that, in understanding the existence dimension methodology (i.e., methodological interpretation leading to the acquisition of existence dimension), unless a methodology that corresponds to the structure and function of project design is presented, it will not be correctly sublimated into a project design. This new book by the author focuses on that issue in examining philosophically the relationship between project design and existence dimension methodology.

Keywords: Existence dimension methodology, existence dimension of design, social feedback thinking; being-in-itself; being-for-itself, etc.